

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K12138

研究課題名（和文）地域連携に基づく妊娠から育児期の切れ目ない父親への子育て支援教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a child-rearing support education program for fathers continuously from pregnancy to child-rearing in collaboration with the community

研究代表者

芳賀 亜紀子（Haga, Akiko）

信州大学・学術研究院保健学系・講師

研究者番号：10436892

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：父親の育児参加促進を目指した妊娠から育児期の切れ目ない父親への子育て支援教育プログラム（以下、子育て講座）を開発・実施した。講座は夫婦で参加する妊娠末期1回、子どもが0歳～3歳まで年1回の合計5回のプログラムである。親になる心構えから子どもの年齢に応じた知識提供・グループワークによる交流・夫婦や親子で行う演習等を取り入れた。

本講座に参加した父親は対照群より「夫婦で子育てをしている」という意識が有意に高く、また、知識獲得だけでなく、親同士の交流が良い情報交換の場となり、夫婦で子育てを振り返る機会となっていた。本講座は、地域における子育て支援の場として有用であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国における少子化問題や児童虐待の増加、育児不安の増加に対して、国では、健やか親子21（第2次）の中で安心・安全な妊娠・出産・育児のための切れ目ない妊産婦・乳幼児保健対策の充実並びに親子を孤立させない地域づくりを目標に挙げている。核家族化が進み、地域において夫婦が協力した育児は必須である。しかし、現在のわが国の母子保健対策は、母子が中心であり、父親を対象とした継続的な支援ではない。地域連携に基づく父親への継続した子育て支援により、次子の出生が増え、合計特殊出生率の増加、虐待や育児不安の減少などわが国の重要課題解決の糸口になるのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：We developed and implemented original “Parenting courses” for fathers from the pregnancy period to the child-rearing period with the aim of promoting their father's participation in child-rearing. The course for couples is a program of 5 times in total, once during pregnancy and once a year for children from 0 to 3 years old. In the course, after providing “preparation to become a parent”, knowledge was provided according to the age of the child. In addition, group work and exercises conducted by couples and parents and children.

Participating fathers had significantly higher sense of “parenting together as a team with their wives”. The course was not only a place to acquire knowledge, but also a place for parents to exchange information with other parents, and it was a good opportunity for reflecting over their parenting as a couple. It was suggested that “Parenting courses” would be useful as a place for child-rearing support in the community.

研究分野：医歯薬学 母性看護学 助産学

キーワード：父親 子育て支援 地域連携 出産前教育 育児 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

平成 26 年わが国の出生数は 100 万人とさらに減少し、少子化が急速に加速していることが明らかとなった。この背景には晩婚化、晩産化、非婚化が上げられる。加えて、子どもを生み育てる家庭での母親の家事育児の負担感が相変わらず高く、父親の育児参加の低さが指摘されている。夫婦協力した育児体制のため、男性を含めた働き方の見直しがされ、平成 19 年に仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章が制定、育児休業についても平成 22 年に改正育児休業法が施行された。しかし、平成 25 年度の男性の育児休業取得率は 2.06%と微増ながらも、取得者の約 6 割は 2 週間未満の休暇となっており、制度の整備はされつつあるが、運用面ではかなり厳しい状況である。

現在の日本では、医療機関、保健センターなど様々な機関が妊娠期から就学前までの支援の担い手になっている。これは、子どもの年齢が上がっていく時に母子を支援する立場が代わる断片的な支援体制となっている。さらに、これらの支援対象は妊産婦や母子などの表記となっており支援対象に父親と明記されているものはほとんどない。

一方、父親の約 6 割が妊娠中の両親学級に参加し、立会い出産に臨むようになった。両親学級では、妊娠中に病院や自治体において父親が妊婦体験を行い、抱っこなどの育児技術等を学ぶ機会がある。ここでの学習により、父親は子育ての開始に必要な知識や技術を習得することになるが、それらは育児を理解するほんの一部にすぎない。その後、子どもの成長に従い、父親の役割や子育てにおける心構えなど、親として成長しながら、子育てを楽しむことにつながるような子育て支援の機会はほとんどないのが実情である。

現在、地域のつながりの希薄化の影響が懸念される。特に、3 歳までの入園前の時期は社会で子どもを育てる地域に根ざした場所において、近い年(月)齢の子どもをもつ集団でのコミュニティの提供は必須であり、その場で専門職が教育の場として関わる有用性は高いと考える。父親の育児参加が多いほど次子出生につながる報告もあり、少子化問題の打破には、父親への継続的な切れ目のない子育て支援は欠かせない重要なものである。

2. 研究の目的

本研究では、自治体との地域連携に基づき妊娠期から育児期への切れ目のない父親への子育て支援教育プログラム（以下、子育て講座）を開発・実施し、その有用性の評価を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

1) 子育て講座の開発に関する調査

父子手帳の実態と望ましいあり方に関する調査

対象：都道府県 47 件、東京都特別区 23 件、全国の市 790 件の合計 860 件のホームページ

方法：平成 26 年 10～11 月に自治体のホームページから「父親」および「子育て支援」をキーワードとし、ホームページ内の検索を実施した。調査内容は父子手帳の配布状況・方法・作成状況であり、単純集計を行った。

保育園に通園する子どもを持つ母親の正規雇用就業継続要因の検討

対象：保育園児を持つ母親 1000 名、回答が得られた 324 名を分析

方法：自記式質問紙を配布し郵送法により回収した。調査内容は母親の就労状況や育児・家事の実態、育児環境、母親から見た父親の育児家事の実態等であり、分析は多重ロジスティック回帰分析を行った。信州大学医倫理委員会の承認を得て実施した。

2) 子育て講座の実施

対象：第 1 子を平成 27 年 1～2 月に出産予定の妊婦及びその夫に病院内産科外来への掲示及び郵送で講座への継続参加を募集した。

方法：講座の定員は夫婦 8 組で、第 1 回は妊娠 36 週頃、出産を経て、第 2 回は生後 1～2 か月、第 3 回は 1 歳、第 4 回は 2 歳、第 5 回は 3 歳の時期に実施した。

3) 子育て講座の評価

(1) 形成的評価

各子育て講座実施後に、参加者に満足度および内容の理解度や感想・要望・意見を自記式質問紙あるいは半構造的面接で調査した。また、次回開催のニーズを問い、プログラム内容の参考にした。

(2) 総括的評価

総括的評価として、本研究の教育プログラムに参加していない方を対照群として 2 回の調査を実施した。

第 1 回妊娠期のプログラム評価

子育て講座全 5 回参加後の育児・家事の実態からのプログラム有用性の評価

4. 研究成果

1) 子育て講座の開発に関する調査

父子手帳の実態と望ましいあり方に関する調査

父子手帳を配布していると記載のあった自治体は 95 件 (11%) であり、配布方法は、母子健康手帳との同時配布が約 6 割で最も多かった。父子手帳の内容は、育児・家事においては父親の関わりについて様々な工夫がされていたが、妊娠・分娩については具体的な関わりの内容が少なく、産褥とワーク・ライフ・バランスは記載自体が少なかった。父親自身が育児参加の意識を高め、学習機会を得るために、多くの自治体での父子手帳の作成および配布、また、内容を充実させる必要性が示唆された。

保育園に通園する子どもを持つ母親の正規雇用就業継続要因の検討

対象の平均年齢は 36.34 歳、平均子ども数は 1.98 人、家族構成は 260 世帯、拡大家族 64 世帯であった。出産後も正規雇用を継続している者が約半数あり、出産を機に退職し出産後は非正規雇用で就業している者が約半数であった。母親の正規雇用就業継続に関連する要因について多重ロジスティック回帰分析を行った結果、育児を理由とした急な遅刻・早退や欠勤に対する職場の理解があること、夫と育児分担について話し合ったこと、家事は女性が適しているとは思わないこと等の項目が抽出された。母親の正規雇用就業の継続には就労環境、家庭での育児家事分担や夫の協力および性別役割意識が重要であることが示唆された。

2) 子育て講座の開発と実施

講座のテーマおよび目標

講座のテーマは『パパとなる、パパをする、そしてパパになる』であり目標を表 1 に示す。子どもが生まれ、生物学的に「父親となる」だけでなく、当たり前前の育児を行う意味の「父親をする」、そして、親役割を果たす意味の「父親になる」ことを目指した。当たり前前の育児とは、仕事が終わると帰宅し、子どもと遊び、世話をし、子どもを寝かしつけた後等に夫婦の時間を持てる父親である。本プログラムを通して、育児も仕事も楽しみ、父親としての自分自身を尊いと思える父親になると考えた。

表 1 本教育プログラム(子育て講座)の目標

子育てする時間を父親が自ら進んで作る事ができる
子育てを楽しみ、重要点や父親の役割を理解できる
子どもの気持ちや子どもとの生活を理解できる
妻を支える意味や方法を理解できる
子育てをしている他の親を支援できる

講座の概要

本講座は、“Becoming Parents Program”¹⁾の考えに基づき、親になる夫や妻のスムーズな親役割獲得を目指し、特に父親への移行に重点を置いたプログラムとし、開発した。

特徴は A. 医学・教育学的根拠を含めた知識提供、B. グループワークを通し、他者の意識や行動を知ることによって自分自身の行動変容につなげる、C. 夫婦で出産を迎え、育児をスタートす、D. 出産後は夫婦の育児を振り返る機会とする、の 4 点である。学習定着率を高めるために講義のみならず、夫と妻に分かれたグループワーク、演習等を行い、休日に 2 時間程度で開催した。

知識提供時には講座専用の資料を用意した。この資料の一部が長野県松本市「パパノート」に掲載された(2016 年発行、2019 年改訂版発行)。講座の運営は大学教員(助産師・看護師)および助産師(病院・開業)が行った。

子育て講座の概要および下記に述べる総括的評価時期を表 2 に示した。

講座の実施

第 1 回は妊娠 36 週頃、出産を経て、第 2 回は生後 1~2 か月、第 3 回は 1 歳、第 4 回は 2 歳、第 5 回は 3 歳の時期に実施した。第 2 回以降は家族と一緒に参加する形とし、遊ぶ時間と参加者同士が交流できる時間も取った。第 4・5 回は子どもを会場横別室の託児・保育に預け、親が集中して学習する時間を設ける等工夫した。

表2 子育て講座の概要

回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
タイトル	妊娠/出産編	育児期編	再会編	2歳児編	3歳児編
(時期)	(妊娠36週頃)	(生後1~2ヶ月)	(1歳)	(2歳)	(3歳)
開催年月	平成26年12月	平成27年3月	平成28年4月	平成29年9月	平成30年9月
【会場】	【大学講義室】	【大学講義室】	【大学講義室】	【大学内保育園】 * 託児あり	【大学内保育園】 * 保育あり
知識提供 (30分)	妊娠期の過ごし方のポイント 分娩期の過ごし方のポイント 育児期生後1ヶ月までのポイント	育児のポイント 講義(小児科医) 「病気・予防接種」 講義(保育士) 「親になるための心構え」	1~2歳児の育児のポイント ワーク・ライフ・バランスの実現	2歳児に起こりやすい事故とケガの応急処置について	講義(保育士) 「自己肯定感って何?」
グループワーク 「テーマ」 (30分)	「夫婦の役割を考える」	「現在の育児で感じていること」	「現在の育児で感じていること」	「現在の育児で感じていること」	「現在の育児で感じていること」
演習 (60分)	分娩時に夫ができること(劇) 育児・沐浴 体験	わらべうた ベビーマッサージの実践(親子遊び)	歌・手遊び 手型・足型アート (絵具) (親子遊び) [保育士監修]	歌・手遊び 創作(粘土) (親子遊び) [保育士監修]	大型絵本の読み聞かせ 創作(紙) (親子遊び) [保育士監修]
(所要時間)					

↑
総括的評価

↑
総括的評価

3) 子育て講座の評価

(1) 形成的評価

第1回から第5回までの講座全体の父親の満足度(VASスケール)は、 $89.2 \pm 9.0\%$ であった。受講した感想は、【同時期に親になった父親同士の交流はよい情報交換になる】、【夫婦で今の育児を振り返る機会になる】、【子どもたちの成長を感じた】、【子どもの成長に沿った情報が得られる】が挙げられ、今後も子どもの年齢に合わせた子育て講座開催の希望があった。

(2) 総括的評価

総括的評価として、本研究の教育プログラムに参加していない方を対照群として2回の調査を実施した。

第1回妊娠期のプログラム評価

第1回子育て講座受講群4組と対照群4組に対し、半構造的面接法によるインタビューを実施した。両群ともに分娩施設での出産前教室に参加している。分娩後入院中に夫婦それぞれに、妊娠期から分娩に向けた思い、分娩当日の思いや行動等を自由に語ってもらった。講座群には受講前後での変化の有無、夫婦で取り組んだことの有無についても伺った。内容分析を記述的に行い、両群の親になるプロセスを比較しながら、講座へ参加した夫婦の語りについて検討した。信州大学医倫理委員会の承認を得て実施した。

対象の年齢は両群ともに夫が30代、妻が20代~30代であり、全例が正期産で分娩時に夫が立ち合いを行っていた。受講群では、夫婦双方が【出産や育児に対するイメージができた】と語った。さらに出産時に夫が【不安にならずに妻のサポートができた】ことにより【夫婦で出産を乗り越えられていた】。妊娠期に実施した第1回の講座は、親役割の獲得を促進することが示唆された。

子育て講座5回参加後の育児・家事の実態からのプログラム有用性の評価

子育て講座を5回継続して受講した子育て講座受講群6組と対照群7組を対象に、育児・家事の実態(育児意識と育児・家事時間、自分自身及びパートナーに対する満足度)等を自記式質問紙調査および育児・家事への思いについて半構造的面接法によるインタビューを実施した。信州大学医倫理委員会の承認を得て実施した。本調査時は第1子が3歳になる時期であり、1~2人の子どもの父親および母親となっていた。対照群では5名の父親が妻の妊娠中に両親学級に参加していたが、子どもが生まれてから子育てに関する講座・研修等を定期的に参加している者はいなかった。

対象の年齢は両群ともに夫が30代~40代、妻が30代~40代であり、家族構成、就業形態等の背景に差は認めなかった。受講群の父親は「夫婦2人で育児をしている」意識が対照群より有意に高かった($p < 0.05$)が、父親の育児・家事時間は、受講群と対照群における差はなかった。父親自身の家事に関する満足度および妻が行う家事に関する夫の満足度は、受講群の方が有意に高く、夫婦で話し合っ協力している様子があった。受講群・対照群ともに父親は、育児・家事への自己満足度は低く、【子どもとの関わりに満足できていない】思いがあり、【子育ての情報を得て、自分が子どもにできることをしたい】と語られた。また、両群ともに、【妻に感謝している思い】が語られたが、受講群は、特に家事に対して【夫婦で話し合っうまくやれている】

という思いがあった。

以上より、夫婦で参加する子育て講座は、親同士の交流が良い情報交換の場となり、夫婦で子育てを振り返る機会となっていた。父親の育児参加促進に関する育児意識に影響する可能性が示され、本講座は、地域における子育て支援の場として有用であることが示唆された。今後、地域において父親に対する子育て講座を継続的に実施していくための体制の整備について取り組んでいきたい。

1) Pamela L, Scott M, Howard J. Becoming parents: how to strengthen your marriage as your family grows. San Francisco, Jossey-Bass, 1999.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Akiko Haga, Chitaru Tokutake, Kesami Sakaguchi, Atsuko Samejima, Miki Yoneyama, Masayoshi Ohira, Motoki Ichikawa and Makoto Kanai	4. 巻 67(2)
2. 論文標題 Autonomic nervous system changes in term infants during early Skin-to-skin Contact(SSC): Examination of SSC effectiveness and the influence of meconium- stained amniotic fluid.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Shinshu Med J	6. 最初と最後の頁 91-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 徳武千足、芳賀亜紀子、坂口けさみ、鮫島敦子、米山美希、横川吉晴、大平雅美、市川元基、金井誠	4. 巻 246(2)
2. 論文標題 Infant suffocation incidents related to co-sleeping or breastfeeding in the side-lying position in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Tohoku Journal of Experimental Medicine	6. 最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 芳賀亜紀子、坂口けさみ、徳武千足	4. 巻 20(12)
2. 論文標題 地域連携に基づく妊娠期から育児期の切れ目ない父親への子育て支援教育プログラムの開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北隆館 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 66-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳武千足、芳賀亜紀子、松崎ちはる、伊藤葵、河西真理子、上原さとわ、坂口けさみ、米山美希、鈴木敦子、金井誠、市川元基、大平雅美	4. 巻 19
2. 論文標題 初めて親になる夫婦に対する親になるための講座が妊娠期から分娩までの思いや行動に与える影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 長野県母子衛生学会誌	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芳賀亜紀子、徳武千足、坂口けさみ、米山美希、鈴木敦子、金井誠、市川元基、大平雅美	4. 巻 19
2. 論文標題 ダウン症候群の子どもを受け入れ育てる育児経験のある両親1組の思い～父親が育児休業を取得中にダウン症候群と診断された関わりを通して～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 長野県母子衛生学会誌	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芳賀亜紀子、今村美羽、大石まりえ、坂口けさみ、徳武千足、米山美希、鈴木敦子、金井誠、市川元基、大平雅美	4. 巻 18
2. 論文標題 全国自治体のホームページ調査による父子手帳の実態と望ましいあり方の検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 長野県母子衛生学会誌	6. 最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 芳賀亜紀子、徳武千足、坂口けさみ、鮫島敦子、米山美希、牧田ゆかり、金井誠、市川元基
2. 発表標題 3歳児を育てる父親および母親を対象とした子育て講座の実施報告 ～妊娠期から取り組みを継続して～
3. 学会等名 第60回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芳賀亜紀子、徳武千足、坂口けさみ、鮫島敦子、米山美希、小木曾綾菜、牧田ゆかり、金井誠、市川元基
2. 発表標題 父親及び母親への子育て講座の実施報告～妊娠期から3歳まで継続した取り組み～
3. 学会等名 第22回長野県母子衛生学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平林優子、芳賀亜紀子、徳武千足、鈴木泰子
2. 発表標題 周産期・育児期にメンタルヘルスの問題を抱える母親と家族への支援体制の現状と課題-1地区の調査より-
3. 学会等名 日本小児看護学会第29回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芳賀亜紀子、坂口けさみ、徳武千足、鮫島敦子、米山美希、小林明日香、小木曾綾菜、牧田ゆかり、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 2歳児を育てる父親および母親への子育て講座開催報告～妊娠期からの継続的な子育て講座を通して～
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米山美希、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鮫島敦子、小林明日香、Hii Ching Ping、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 保育園に通園する子どもを持つ母親の正規雇用就業継続に影響する要因
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hii Ching Ping、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鮫島敦子、米山美希、小林明日香、金井誠
2. 発表標題 小学生までの子どもを養育している共働き夫婦のワーク・ファミリー・コンフリクトと関連する要因
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林明日香、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鮫島敦子、米山美希、原ゆかり、Hii Ching Ping、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 妊婦の絵本読み聞かせが胎児および妊婦の自律神経機能、妊婦の心理面、胎児の睡眠覚醒状態・胎動に与える影響
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米山美希、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鮫島敦子、小林明日香、Hii Ching Ping、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 正規雇用就業継続に関連する要因と就業に対する母親の思い
3. 学会等名 第21回長野県母子衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hii Ching Ping、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鮫島敦子、米山美希、小林明日香、金井誠
2. 発表標題 小学生までの子どもを養育している共働き夫婦のワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)とワーク・ファミリー・コンフリクト(仕事と家庭の両立葛藤)の関連についての研究
3. 学会等名 第21回長野県母子衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 徳武千足、芳賀亜紀子、坂口けさみ、米山美希、鈴木敦子、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 乳児を育てる母親における添い寝及び添え乳のインシデント経験に関連する要因の検討
3. 学会等名 第58回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木敦子、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、米山美希、原ゆかり、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 周産期における母親の唾液中オキシトシン濃度の推移と児への愛着との関連
3. 学会等名 第58回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 芳賀亜紀子、坂口けさみ、徳武 千足、鈴木 敦子、米山 美希、町田明日香、小木曾綾菜、原 ゆかり、金井 誠、市川 元基、大平雅美
2. 発表標題 妊娠期からの子育て支援教育プログラムの有用性の検討～1歳児を育てる両親への子育て講座の開催を通して～
3. 学会等名 第57回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 徳武千足、坂口けさみ、芳賀亜紀子、米山美希、鈴木敦子、伊藤葵、河西真理子、上原さとわ、松崎ちはる、町田明日香、小木曾綾菜、原ゆかり、金井誠、市川元基、大平雅美
2. 発表標題 初産婦及びその夫への子育て支援教育プログラム介入の有無による妊娠期から分娩後までの思い
3. 学会等名 第57回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 芳賀亜紀子、坂口けさみ、徳武 千足、鈴木 敦子、米山 美希、町田明日香、小木曾綾菜、原 ゆかり、金井 誠、市川 元基、大平雅美
2. 発表標題 父親および母親への1歳児子育て講座開催の取組み
3. 学会等名 第19回長野県母子衛生学会学術講演会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松崎ちはる、伊藤葵、河西真理子、上原さとわ、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、米山美希、鈴木敦子、原ゆかり、市川元基、金井誠、大平雅美
2. 発表標題 母親及びその出産に立ち会った父親の思いと行動に関する質的検討
3. 学会等名 第19回長野県母子衛生学会学術講演会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 芳賀亜紀子、徳武千足、坂口けさみ、鮫島敦子、金井誠、市川元基
2. 発表標題 父親及び母親に妊娠中から3歳まで継続した子育て講座受講後の育児に関する意識と実態
3. 学会等名 第61回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 監修：坂口けさみ、金井誠、編集：松本市こども部こども育成課	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松本市発行	5. 総ページ数 57
3. 書名 松本市パパノート-親子の笑顔のために-	

1. 著者名 監修：坂口けさみ、金井誠、編集：松本市こども部こども育成課	4. 発行年 2016年
2. 出版社 松本市発行	5. 総ページ数 58
3. 書名 松本市パパノート	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	徳武 千足 (Tokutake Chitaru) (00464090)	信州大学・学術研究院保健学系・講師 (13601)	
研究分担者	坂口 けさみ (Sakaguchi Kesami) (20215619)	信州大学・医学部・特任教授 (13601)	
研究分担者	大平 雅美 (Ohira Masayoshi) (50262738)	信州大学・学術研究院保健学系・教授 (13601)	
研究分担者	鮫島 敦子 (Samejima Atsuko) (50759363)	信州大学・学術研究院保健学系・助教 (13601)	
研究分担者	金井 誠 (Kanai Makoto) (60214425)	信州大学・学術研究院保健学系・教授 (13601)	
研究分担者	市川 元基 (Ichikawa Motoki) (60223088)	信州大学・学術研究院保健学系・教授 (13601)	
研究分担者	米山 美希 (Yoneyama Miki) (90747891)	信州大学・学術研究院保健学系・助教 (13601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	牧田 ゆかり (Makita Yukari)	信州大学医学部附属病院・看護部・師長	
研究協力者	小木曾 綾菜 (Ogiso Ayana)	信州大学医学部附属病院・看護部・助産師	
研究協力者	小林 明日香 (Kobayashi Asuka)	信州大学医学部附属病院・看護部・助産師	
研究協力者	佐藤 亜矢子 (Sato Ayako)	松本市健康福祉部・健康づくり課北部保健センター・課長補佐	
研究協力者	田口 輝子 (Taguchi Teruko)	信州大学・おひさま保育園・園長	
研究協力者	平林 優子 (Hirabayashi Yuko)	信州大学・学術研究院保健学系・教授 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関